

- 1 課題名 養殖衛生管理体制整備事業（海面）
- 2 区分 国庫補助（国費：県費＝1：1）
- 3 期間 平成15～20年度
- 4 担当 養殖栽培部（堅田昌英）
- 5 目的

養殖魚介類の疾病のリスク管理を適切に推進するため、防疫指導を行うことで疾病のまん延防止を図り、安心・安全な養殖水産物の生産・供給体制を確立する。

## 6 成果の要約

### (1) 成果の概要

**養殖場の巡回指導** 県内を北部（由良湾）、中部（田辺湾）、南部（串本浅海漁場）および東部（勝浦湾）の4海域に分け、毎月1回ずつ防疫パトロールを実施した。

**水産用医薬品残留検査** 養殖マダイ筋肉中の薬剤残留検査を実施するため、平成18年7月13日から14日にかけて田辺湾（魚体重0.8kg）および串本浅海漁場（魚体重1.5kg）から5尾ずつサンプリングして塩酸オキシテトラサイクリンの残留検査を行ったが、検出されなかった。

### 魚病検査

1) 魚病診断件数 診断件数は16魚種101件で、昨年度のほぼ2倍であった。

魚種別ではマダイが52件で最も多く、次いでマサバ11件、イシダイ7件、ヒラメ6件、シマアジ5件で、これら5魚種で全体の約80%を占めている。月別に見ると6～10月の高水温期に多く、毎月11～18件の魚病診断があった。

2) 魚種別魚病発生状況 マダイではイリドウイルス病が7～11月にかけて、単独およびエピテリオシスチスや寄生虫病との合併症で22件発生した。7月にはリンホシスチス病がトリコジナとの合併症で1件見られた。細菌病は単独と寄生虫病との合併症で36件見られ、そのうち、エピテリオシスチス症17件、滑走細菌症12件、エドワジエラ症8件、ビブリオ病3件であった。寄生虫病は発生件数27件で、海産白点病が9月に2件発生し、多大な被害を及ぼした。12月にも1件見られているが、秋季から継続したものであった。他にはビバギナ、ラメロディスカス、トリコジナ、クピナガ鉤頭虫およびベネデニアの寄生が見られ、近年多様化していると言える。

マサバでは5～8月にかけて連鎖球菌症が単独および合併症で11件見られ、多大な被害を及ぼした。

イシダイではイリドウイルス病が単独および合併症で5件発生し、細菌病は6月にビブリオ病と滑走細菌症の合併症が1件見られた。9月および10月には

海産白点病が発生し、多くの被害を出した。

ヒラメではVHSが2月に単独で1件発生し、細菌病は単独および合併症でエドワジエラ症が3件、滑走細菌症が2件、連鎖球菌症が1件発生した。寄生虫病はイクチオポド症が滑走細菌症との合併症で1件発生した。

シマアジではVNNが12月に1件発生し、細菌病は単独および合併症で3件発生した。また、10月には真菌症が1件見られた。

ブリでは連鎖球菌症が8月に寄生虫病との合併症で2件発生した他、9月に海産白点病、10月にノカルジア症とベネデニアの合併症がそれぞれ1件ずつ発生した。

クエではイリドウイルス病が8月に単独および合併症で2件発生した他、11月に滑走細菌症が1件見られた。

トラフグ、オニオコゼ、カワハギおよびイサキでは滑走細菌症が単独で発生し、キジハタ、イシガキダイおよびカサゴではビブリオ病が単独および合併症で確認された。12月にイシガキダイでビブリオ病と海産白点病の合併症が見られたが、これは本疾病が発生したマダイおよびイシダイ養殖場の近くで飼育されていたものであった。

3) 健康診断件数 診断件数は12魚種71件で、6月と11月にマダイの検査件数が多かったことにより、昨年度に比べ40件増加した。また、昨年度1件のみであったワクチン接種が、今年度は4魚種5件に増加した。

魚種別に見ると、マダイが中間魚と稚魚を合わせて44件で最も多く、次いでマサバ中間魚の8件、シマアジの5件（中間魚・稚魚・卵）となっており、他の魚種は3件以下であった。マダイ稚魚ではエピテリオシスチス、ビバギナ、ラメロディスカスおよびトリコジナの寄生が確認され、中間魚ではこれらの寄生に加え、クピナガ鉤頭虫が見られた。クルマエビ（稚エビ）は種苗放流前のPAV検査を行ったが、異常はなかった。

## 7 成果の取り扱い

### (1) 成果の普及

・防疫パトロール

### (2) 成果の発表

平成18年度瀬戸内海・四国ブロック魚病検討会、平成18年度県内養殖衛生対策会議